山と博物館

第36巻 第6号 1991年6月25日 大町山岳博物館

庭先に舞い降りたシジミチョウを想い　写真と文　斎藤　妙子

今年の冬は大変な大雪でしたが、厳冬にも耐えて、フクジュソウ、フキノトウクロッカス・・・、早春を告げる草花が雪融けの間から芽を出し、花を咲かせます。それぞれに美しく、楽しい風情に心弾む思いです。

六月ともなれば我家の近くに野バラが咲き乱れて、白い花と甘い香りが一面に漂い、蝶や蜂が群がります。

そんなある日、庭の片隅の青葉の上に、何とも可憐なシジミチョウが目に止まり、小さないきものの「生」に感動し、思わずシャッターを押しました。

大町はよいところだと、カメラを持つようになってあらためて感じております。

美しい山々、湖、白樺の森、野の花々のまわりには香気が漂い、私の心は自然の素朴さと清らかさに育まれて、ひと呼吸で新鮮な生命が蘇るような気がします。とりわけ朝の空気の透明感は素晴らしいです。

数年前に他界した母がよく短歌を詠んでおりました。その中に私も大好きな歌があります。

かっこうの　遠く聞えて　出揃ひし
豆の若葉に朝風わたる

自然を愛し、野草をいとおしんだ母のやさしさを思い出します。

人間もこの自然の中に生かされていることも、写真を撮るようになって知りました。いつまでも、この自然が失なわれないことを願っております。

（大町市在住）

昨今の中高年登山

～長野県山岳総合センター実態調査より～

白鳥正夫

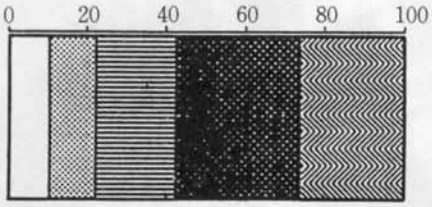
近年、中高年登山者の急増が話題となり、少し大げさな言い方をすれば、ハイキングから高山にいたるまで日本の山は中高年登山者で占領されてしまった、というほどの状況となっている。

山岳総合センターでも五年前から五十歳以上によるシルバー登山講習会を行っているが、三十名の定員に、毎回五倍を越える希望者が殺到している。そこで、本当のところその実態はどうだろうかと、昨年、当センターで山小屋関係者と中高年登山者の両方を対象にしたアンケート調査を行った。その調査を中心に、昨今の中高年登山について考えてみたい。

山岳総合センターのシルバー登山講習会（唐松岳方面）にて

山小屋に泊まった中高年者の割合

人数	子供～10代	12,530	8.5%
	20代	20,810	14.0%
	30代	31,940	21.6%
	40代	43,150	29.1%
	50代以上	39,770	26.8%



40代と50代以上を合わせると55.9%を占め、特に40代登山者の割合が著しい。また、中高年者が急に目立つようになったのは5～6年前からといわれている。

長野県内の山岳の登山者の推移は、県警が統計をとり始めた昭和二十九年に十四万人だったといわれ、昭和三十一年、日本隊がマナスル初登頂（八一六三m）した快挙をきっかけにして、若者の間にスポーツアルピニズムを指向した登山ブームがわき起こり、昭和三十年代～四十年代にかけて登山者の数はぐんぐん増えていった。そのころの中高年登山者はほんの少数の珍しい存在だった。ヒマラヤの未踏峰がほぼ登り尽くされた頃と時を同じくした昭和五三年、一一〇万人まで達したのをピークに登山者は減少しはじめ、現在の登山者数は六十万人を少し超えたあたりだという。その多くは中高年者で占められて、若者はどこへ行ってしまったか、と嘆かれている昨今である。

中高年登山者に特徴的なことは、グループや旅行社、あるいは講習会や登山教室といった「連れられ登山」が非常に多いことである。「連れられ登山」では、登る回数に比べて登山技術がなかなか経験として自分の身についていかない。遭難対策協会などの山岳関係者は、山の本当の怖さを知らない者が山にどんどん登ってくることの怖さ、というものを痛切に感じてその対策に苦慮しているという。特に高齢者ほど、体力はなくても気力に勝り、人の忠告や意見を聞かないがんこなところが見られ、たとえば、〝命をかけても百名山に登るぞ〟という人が随分おり、それを止めるのは難しいからだ。

また、中高年者は、これまで他のスポーツは全くやってこなくて〝山なら歩ける〟ことから健康のために山登りを始める場合が多く、こうした全く白紙の人達は、当然、体力も知識もなく、都会と山を同じ感覚で考えてしまうため、気候や気温の変化といった自然条件の違いからはじまり一から山の常識を教えていかねばならない。

山登りは、確かに気軽に始められるスポーツだが、一歩間違えると命にかかわり、捜索等多くの人々に迷惑をかけることになる。また、他のスポーツは、できる、できないがハッキリ分かってランクづけもしやすいが、山登りは、ある程度経験を積まないと、どこが危険でどこが危険でないか、といった力に応じたランクづけに難しさがある。

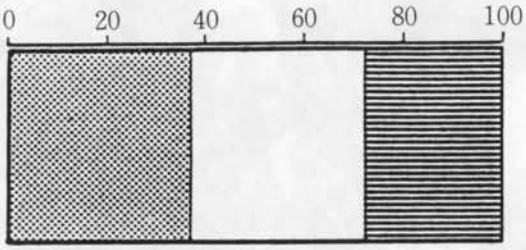
左上に挙げた中高年登山者のタイプのグラフで、昔から続けている登山者はほとんど問題ないが、年をとってから始めた中高年登山者に対しては、山小屋関係者から次のような相当批判的な声が寄せられている。

・年をとってから登山を始めた人の多くは、わがままでマナーやルールを守らない。
・金さえ払えばなんでもやってくれると思っている人がいる。
・山を一般の観光地の延長に考え、風呂がない、トイレが臭い、水が自由に使えない、狭くて寝られないと文句を言う。
・自己中心、無計画、わがまま、自信過剰で小屋の人の注意を聞かない。
・早春や晩秋の登山者も増えたが、山の状況を理解せず、夏山と同じ感覚で登って来る人がいる。
・仲良しグループ的な感じが多く、リーダーがハッキリせずに不安を覚える。
・装備は最新の物を身につけ、一見ベテラン

中高年登山者のタイプ

いつ山登りを始めたか

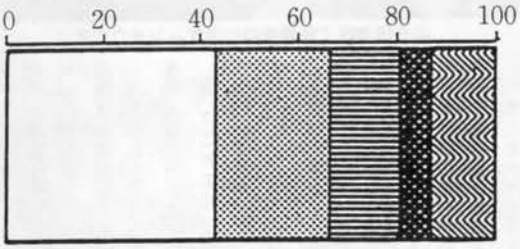
人数	最近始めた	72	36.0%
	中断し、また始めた	73	36.5%
	昔から続けている	55	27.5%



ひとくちに中高年登山者といっても、最近（1～6年前）山登りを始めた人、以前やっていてしばらく中断し、中高年になってまた始めた人、若いころからずっと続けている人の3つのタイプがあり、それぞれほぼ3分の1ずつということがわかる。

一年間にどれくらい山に行くか

人数	1～5回	85	43.8%
	6～10回	46	23.7%
	11～15回	27	13.9%
	16～20回	13	6.7%
	21回以上	23	11.9%



年間10回以上山に行くと答えた人が約3分の1もおり、21回以上の人が1割を越えているのは驚きであった。そうした人達は、時間的な余裕が出来たことや山登りの面白さ、楽しさに夢中になり、百名山を目標にしたりして毎週のように山に行っているのであろうか。

と見間違えるが、山の知識や経験に乏しい。

そこで問題となるのが、こうした中高年登山者に対する指導者をどう養成し、グループの組織化を図るかといった点である。

山に登りたがっている高齢者に、止めなさいと言うのでなく、山の楽しさと山の怖さを伝え、ひとつひとつこまめな対応ができるリーダーを増やすこと、〝連れていってもらう〟意識から〝自分がリーダーになったつもりで計画を立てて山に行く〟登山者になること、そして、お互いがコントロールし合えるいい仲間を持つことの三点が、安全で楽しい登山を目指す中高年登山の理想の姿ではないだろうか。

現在の中高年登山ブームは今が頂点ではないかといわれる。なぜかというと、今の中高年者は戦争前後のつらくがまんするという時代を経てきており、この年代が去った後の次に来る中高年者は、危険、汚い、苦しい登山にこれほどまで熱中するとは思えないからだという。

山で危険な目に遭ったこと

アンケートした二〇〇人中の二十一％にあたる四十二人が、遭難、あるいは遭難一歩手前の経験があると答えている。内容を分類すると次のようになる。

- 道に迷う　17件
- 荒天に遭遇　10件
- 転落、滑落　9件
- 落石にあう　3件
- 高山病　2件
- 雪崩　1件

しかし、なぜ中高年登山ブームが起こったのかその原因をいろいろあげていった時、最大の要因は自然の持つ魅力ではないかと思う。そうだとしたら、3Kを嫌う世相とはいえ、この素晴らしい自然と、汗を流して歩く爽やかさを中高年だけが味わうなんて狡いぞ、と気付いた若者達がいずれ山に戻ってくるのではないだろうか。また、そう期待したい。

（長野県山岳総合センター専門主事）

山岳総合センターのシルバー登山講習会（唐松岳方面）にて

最近の北ア山麓両棲類事情

長沢　武

山岳博物館で飼育中のヒダサンショウウオ

1、ハクバサンショウウオ

一九八七年秋、京都大学松井正文氏が、新種ハクバサンショウウオとして発表したサンショウウオは、一九七五年五月十日、筆者が偶然にも白馬村落倉湿原で卵嚢一対を発見したもので、卵嚢は幾つかの点が、既報のサンショウウオのものとは異なっていた。

その後このサンショウウオは前記の松井氏のもとで研究され、新種であることが分かった。白馬村でも一九八五年一月、これを村の天然記念物に指定した。

2、ヒダサンショウウオ

本種は北アルプスを取り囲む岐阜、石川、富山、新潟、長野県下の一部から棲息が報告されていた。長野県下では木曽と下伊那郡下の山間で棲息が確認されており、後立山方面にも棲息しているだろうとの予測は以前から持たれていた。

それが一九九〇年十月三十日、偶然にも白馬村松川北股入りの、同河川の左右両岸の落葉の下から各一匹ずつ筆者が採集し、現在大町山岳博物館で飼育中である。

木曽谷の報告では四月中旬渓流の石に卵は産みつけられるようで、白馬村では既に懸川雅市、岸富士夫らによって本種は、姫川より東部の菅入沢で、一九八六年十月末に数尾が採集され報告されている。

以上からして、今後大北地方から該種の新産地が報告されることが期待できる。

3、タゴガエル

本種の棲息が北ア山麓で最初に発見されたのは、一九六一年六月三日、白馬村松川入りの沼池近くの小沢と、同年七月二十八日、八方池で筆者によってであった。

その後該種は、姫川より東の、峯方黒豆の沢や野平のキウリ流し沢でも一九七四年六月に、産卵中のものが発見され、大北地方には広範囲に棲息していることが予想されていた。

たまたま本年五月下旬から六月上旬にかけ、白馬、小谷地方の東西の山間地の小沢を集中的に十数ケ所調査したところ、いずれも棲息を予測した地点で該種の産卵のための鳴声を聞き、その棲息を確認することができた。

該種の現在までの棲息確認地は、南は大町市の鹿島川出合いや青木湖スキー場の小沢、北は新潟県境の大網から湯峠への道沿いの小沢、紙すき牧場などで、今後調査が進めば大北地方の全町村域で発見されるものと思われる。

4、モリアオガエル

北ア山麓の山間地には各所にモリアオガエルが棲息しており、山田では水田の畦に卵を産み、池の木の枝にはあまり産まなかった。ところが一九七一年以来の減反政策で山田が放棄され、作られなくなった昨今では、産所を無くされたモリアオガエルは、池の端の木の枝に卵を産むようになり、見事な光景があちこちで見られるようになったのである。

（大町山岳博物館嘱託員）

博物館だより

開館40周年記念　7月21日～8月25日

宮崎学動物写真展　展示写真約61点

自然を知るよろこび

松風の音を聞いたことがありますか。

毎月ある満月を、一年間見続けたことがありますか。

小川のせせらぎが春、夏、秋、冬で、音色をかえることを知っていますか。

フクロウがたくさんの言葉をもって、夜の森の中で、会話をしていることを知っていますか。

自然界には、私たちの知らないサインがいっぱいあります。そのサインに出逢うことは、いつも新しい感動の発見でもあります。自然界から出されているサインを知るマニアルなんてありません。マニアルは体験を通して自分で見つけるしかないからです。

僕は、そんな自然界から送られてくるサインを見つけることがすきです。僕はそんな出逢いを記録しながら、人間も『大きな自然に守られながら』生きていることに気がつきました。

よく『自然保護』などと言葉では簡単に言いますが、私たち人間こそ〝自然に保護〟されながら生きているのです。人類とて地球のほんの片隅に住わせてもらっている『野生動物』にすぎません。

だから『物を考えることのできる動物』としての私たち人間は『いったい何をしたらよいのだろうか』と、僕はいつも考えてきました。そこで僕にできることと言えば、自然界から送られてくるサインを『視覚の世界に置き換えて』皆様にお送りすることではないかと思うのです。そんな気持で撮り続けているのが、今回の展示作品です。ご覧いただければ幸いです。

宮崎　学

（常設展とも通常料金・会期中無休）

山と博物館第36巻第6号
一九九一年六月二十五日発行
発行所　長野県大町市　TEL㉒〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、二三〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三二九三）